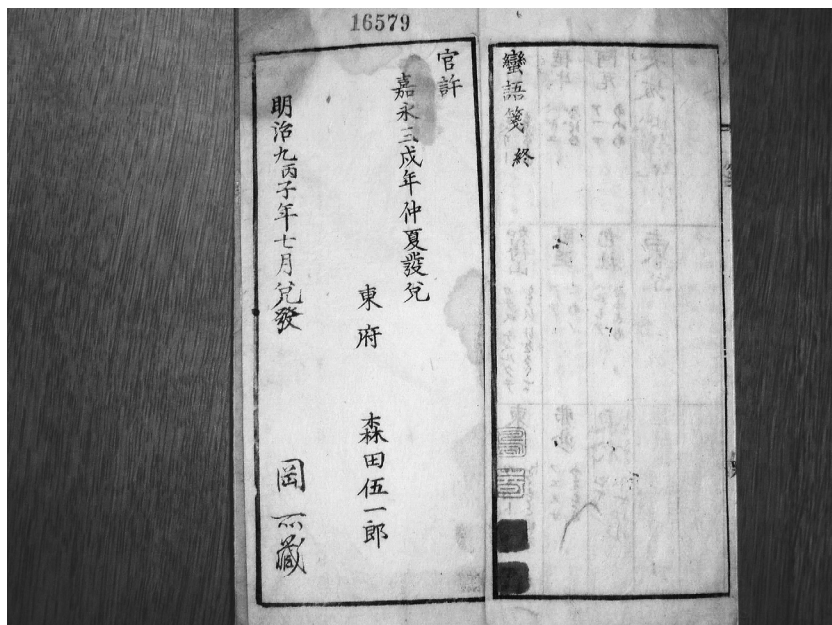
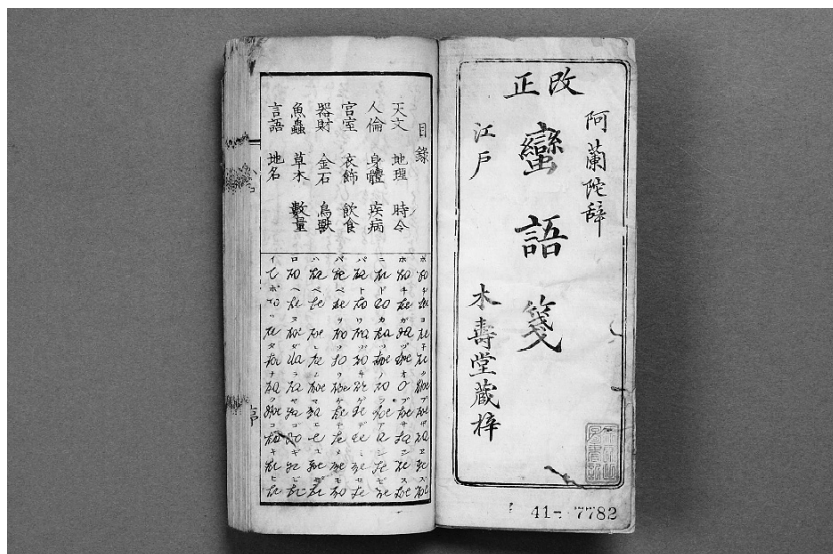




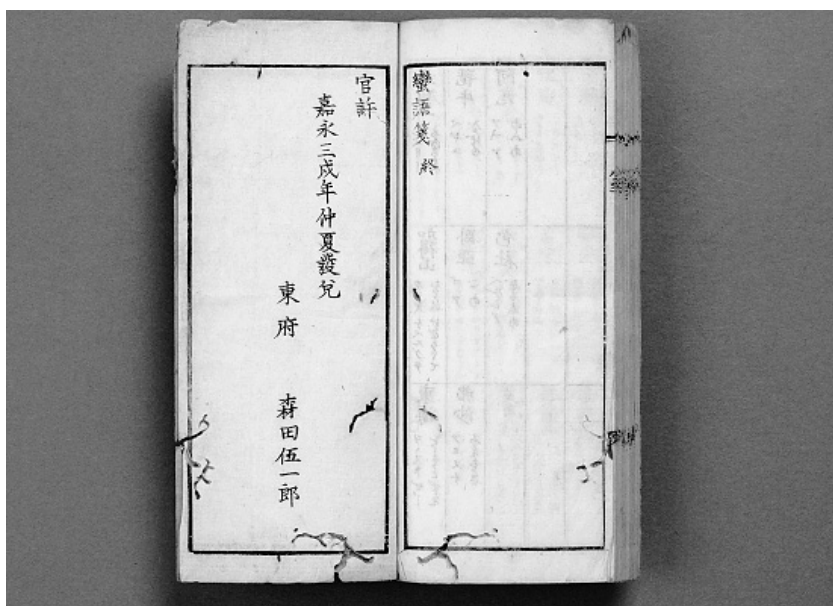
図版 3：①東北大学附属図書館狩野文庫本（明治 9 年再刷本）奥付部分



図版 4：①東北大学附属図書館狩野文庫本（明治 9 年再刷本）表紙



図版 1：④早稲田大学附属図書館洋学資料文庫本，見返しおよび目録部分



図版 2：④早稲田大学附属図書館洋学資料文庫本，奥付部分

丸山 健一郎 2008 「『改正阿蘭陀語』の位置付けをめぐって——『改正増補蛮語箋』の影響と
長音表記——」『同大語彙研究』10, pp. 12-26

注

- ① 図示するならば、杉本 1978d の示す影響関係は以下のものであり、

森島『類聚紅毛語訳（蛮語箋）』→箕作『改正増補蛮語箋』

↓

(↓)?

森田『改正蛮語箋』=森田『改正阿蘭陀語』

本稿が提案する影響関係は以下の通りである。

森島『類聚紅毛語訳（蛮語箋）』

↓

箕作『改正増補蛮語箋』→森田『改正阿蘭陀語』→(≠)森田『改正蛮語箋』

- ② 『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』の語彙には、特に番号が附されているわけではない。両資料ともに縦書きの資料であるところから、本稿では冒頭の天文部の最初の語つまり、最右1行目の最上段から、つまり『改正蛮語箋』では本文1丁表3行目の上段「天^{テン}ヘーメル／へへめる」を1番として、3行目中段、3行目下段、4行目上段の順番で、最終1378番となる本文49丁表3行目中段「包社 ベルシア／べるしあ」まで通し番号を附した。掲出する表中の数字や異同箇所を確認し考察する際の根拠となる具体的な用例の識別を行うための措置である。なお、翻刻に際しては、以下の方針に従う。①見出し語については、可能な限り原資料の表記を優先するが、入力都合で再掲が困難な場合、適宜、異体字・旧字を通行字体に改める。②判定困難箇所が散見されるため、蘭語カタカナ表記の小書きの識別はせず翻刻でも使用しない。③蘭語ひらがな表記について、変体仮名は通行字体に改める。
- ③ 『改正増補蛮語箋』については、櫻井 2005a・2005b が、現在のところ最もよくまとまったものといえる。また、版本の分類については、櫻井 2003 が詳しい。櫻井 2003 に拠り、『改正増補蛮語箋』の版本について整理するならば、①初版無刊記本甲類→配り本、②初版無刊記本乙類→配り本、③初版安政四年本類→売り広め認可後の印本、④再版本類→偽版（海賊版）もしくは復刻版、となる。ここで改めて確認しておくべきことは、『改正増補蛮語箋』の出版では、印刷の許可と、売り広めの許可とに時間差が生じている、ということである。上記①-④のなかで、嘉永3年に存在したと考えられるものは①②の2種類で双方とも配り本である。
- ④ 本稿では触れられなかったが、『改正阿蘭陀語』と『改正蛮語箋』の間では、版木・見出し語・振り仮名以外に、「う」による長音表記などオランダ語のひらがな表記の方針にも差異がみられる。

参考文献

- 櫻井豪人 2003 「『改正増補蛮語箋』の書誌と出版事情」『茨城大学人文学部紀要 人文科学論集』第40号, pp. 77-86
- 2005a 『類聚紅毛語訳・改正増補蛮語箋・英語箋 I 解説・対照表・索引編』港の人
- 2005b 『類聚紅毛語訳・改正増補蛮語箋・英語箋 II 影印版』港の人
- 杉本 つとむ 1978a 『江戸時代蘭語学の成立と展開Ⅲ』早稲田大学出版部
- 1978b 『箕作阮甫と『改正増補蛮語箋』』杉本 1978a, pp. 553-580
- 1978c 「森島中良と『類聚紅毛語訳』」杉本 1978a, pp. 509-552
- 1978d 「〈補説〉：森田伍一郎『改正蛮語箋』（『改正阿蘭陀語』）の考察」杉本 1978a, pp. 573-580
- 2000 『洋学資料文庫①蛮語箋』皓星社

表6) 『改正阿蘭陀語』と『改正蛮語箋』の振り仮名不一致の内訳

	項目・箇所	a	b	c	d	e	f	g	計(n ₁)	百分率 (x ₁ =100n ₁ /310)
天文	18・19	3	1	1	12	0	1	1	19	6.12%
地理	8・8	3	1	0	2	0	1	1	8	2.58%
時令	3・3	2	0	0	1	0	0	0	3	0.96%
人倫	50・51	7	3	1	31	0	1	7	51	16.45%
身體	26・26	7	5	1	9	0	1	3	26	8.38%
疾病	22・23	2	1	1	9	3	4	3	23	9.35%
宮室	19・19	3	1	1	10	0	0	4	19	6.12%
衣飾	8・8	1	5	0	2	0	0	0	8	2.58%
飲食	10・10	0	5	0	3	0	0	2	10	3.22%
器財	37・37	10	14	0	6	0	6	1	37	11.93%
金石	6・6	2	1	1	0	0	2	0	6	1.93%
鳥獸	18・18	8	5	0	4	0	0	1	18	5.80%
魚蟲	6・6	1	4	0	0	0	1	0	6	1.93%
草木	35・35	10	8	2	8	0	4	3	35	11.29%
數量	7・7	1	0	0	0	0	6	0	7	2.25%
言語	30・31	7	5	0	11	0	5	3	31	10.00%
地名	6・6	1	1	0	0	0	4	0	6	1.93%
計(n ₂)	313	68	60	8	108	3	36	29	313	102.82%
百分率 (x ₂ =100n ₂ /310)		21.90%	19.35%	2.58%	34.83%	0.96%	11.61%	9.35%	100.58%	

『改正蛮語箋』の位置付け

②、『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』の対照結果から、『改正蛮語箋』は、より直接的には、『改正阿蘭陀語』に改変を加えて成立したと考えられる。

以上を勘案すると、『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』とを「異名同書」とすることは資料の位置づけとして適当ではない。『改正蛮語箋』は『改正阿蘭陀語』を基とし、改変を加えて成立した別本と位置付けるべきである。

『改正阿蘭陀語』から『改正蛮語箋』への改変に当たり、どのような改変意図や規範意識があったのか、あるいはなかったのかというような問題については改変の詳細を検討し、表記の傾向と実態を基に考察を加えるべきであるが、本稿では立ち入ることが出来ていない^④。今後の課題とし後考を俟ちたい。

表5) 振り仮名異同箇所

改正阿蘭陀語		改正蛮語箋	
彗星	ホウキボシ	彗星	スイセイ／ハ、キボシ
北極	ホツキヨク	北極	ホクキヨク
大風	オウカゼ	大風	オホカゼ
順風	シユンプウ	順風	シユンプウ
大雨	タイウ	大雨	オホアメ
雷	ライ	雷	イカツチ
電	デン	電	イナビカリ
天晴	ハレル	天晴	ソラハレル
天陰	クモル	天陰	ソラクモル
暗	クラキ	暗	クラシ
東	ヒンガシ	東	ヒガシ
南	ミンナミ	南	ミナミ
寒	サムサ	寒	サムシ
涼	ス、シ	涼	ス、シ、
暑	アツサ	暑	アツシ
湿	シメリ／シケ	湿	シメリ
赤道	セキドウ	赤道	セキダウ
黄道	クワウドウ	黄道	クワウダウ

c. 彫り間違いの可能性のあるもの (40. 涼), d. 別の語に置き換えられているもの (8. 彗星, 11. 北極, 20. 大雨, 29. 雷, 30. 電, 32. 天晴, 33. 天曇, 34. 暗, 35. 東, 37. 南, 39. 寒, 42. 暑), e. 縮約語 (該当なし), f. 補入・増補 (8. 彗星 * d. と重複する), g. 削除 (43. 湿)。以上の処理により, 天文部の不一致 (18項目19箇所) の内訳は, 多い順に, d が12/19箇所 = 63.15%, a が3/19箇所 = 15.78%, b, c, f, g がそれぞれ1/19箇所 = 5.26%, e は該当なし = 0%, とする結果になる。この処理を全体に対して行った結果を, 表6に掲出する。結果として, 不一致の内訳で一番多いものは, d. 別の語への置換であった。また, f. 補入・増補が36箇所と1割強みられる。

5.3. 考察

『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』を対照

した結果, 以下の知見を得た。

見出し語の異同箇所により, 『改正蛮語箋』は『改正阿蘭陀語』に改変を加えて編まれた資料であると考えられ, 『改正増補蛮語箋』を参照した可能性は低い。

見出し語振り仮名の異同箇所は全体で2割を超え, 別語への置き換えや仮名遣いの変更も多い。『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』とは, 成立の先後関係もあり別本と考えるべきである。

6. おわりに

以上, 幕末期における蘭学知識の浸透と資料間の系譜・享受関係に着目し, 森田伍一郎『改正蛮語箋』(嘉永3年1850)について, 先行資料との対照調査の結果と考察を示した。本稿の主旨は, 以下の通り。

- ①. 見出し語の対照の結果, 『改正蛮語箋』は, 森島中良『蛮語箋』よりも箕作阮甫『改正増補蛮語箋』に近く, 『蛮語箋』単体に拠って成立したとは考えられない。

5. 2. 振り仮名の対照

『改正蛮語箋』において改変された内容としては、見出し語への「振り仮名」も挙げられる。その異同を見るために、『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』の見出し語の振り仮名について対照調査を行う。

調査対象とするのは、『改正蛮語箋』の見出し語1378項目とそれに対応する『改正阿蘭陀語』の見出し語(1382項目中)1378項目である。対照する『改正阿蘭陀語』の本文は、東北大学附属図書館狩野文庫本(書誌 ID21252490, 請求記号 10055-1, 登録番号 01601386753)のマイクロフィルム(東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成[第4門 語学・文学](BN11641308) MF: DCA0010258)からの紙焼きを用い、早稲田大学附属図書館洋学資料文庫本(文庫8/c530)をはじめとする諸本を参照した。

対照の結果、『改正阿蘭陀語』の見出し語の間で不一致が見られた項目数と不一致率を掲出したものが、表4である。不一致率(%)の算出には、以下の式を用いた、不一致率(%)=不一致項目数÷項目数×100。

全体では、310/1378項目(22.49%)の振り仮名で不一致が見られた。不一致が多く見られたのは、言語部(30/80項目=37.50%)で、続いて天文部(18/49項目=36.73%)、飲食部(10/37=27.02%)、疾病部(23/80項目=28.75%)、身体部(26/98語=26.53%)、宮室部(19/74項目=25.67%)、鳥獣部(18/78項目=23.07%)などの部が、平均値を越えている。逆に、時令部(3/45項目=6.66%)、魚虫部(6/64項目=9.37%)、地理部(8/60項目=13.33%)、衣飾部(8/58項目=13.79%)、金石部(6/39項目=15.38%)などでは、比較的『改正阿蘭陀語』に近い振り仮名が採用されていると考えられる。

表4) 振り仮名対照結果

	項目数	不一致	不一致率
天文	49	18	36.73%
地理	60	8	13.33%
時令	45	3	6.66%
人倫	155	50	32.25%
身体	98	26	26.53%
疾病	80	23	28.75%
宮室	74	19	25.67%
衣飾	58	8	13.79%
飲食	37	10	27.02%
器財	215	37	17.20%
金石	39	6	15.38%
鳥獣	78	18	23.07%
魚虫	64	6	9.37%
草木	161	35	21.73%
数量	50	7	14.00%
言語	80	30	37.50%
地名	35	6	17.14%
合計	1378	310	22.49%

5. 2. 不一致の内訳

天文部を参照しながら、処理の内訳を確認する。表5は、天文部の振り仮名を対照し、異同を抽出したものである。これを以下のように分類する。a. 仮名遣・表記の異同(15. 大風, 44. 赤道, 45. 黄道,) b. 濁音半濁音の処理に関する異同(16. 順風),

「天文」部では「12. 雲」のみで重複せず、「天文」の見出し語数に差異がある。

【参考】『改正増補蛮語箋』巻一「天文」部, 「雲 wolk (ウラルク).」(1丁裏), 「雪 sneeu w (スネーウ)」(2丁裏)。

- ②『改正阿蘭陀語』「身體」部, 「408. 肝 (アセ) レーフル/れへふる」 「392. 汗 (アセ) ズウエート/ずうゑへと」。『改正蛮語箋』「身體」部では, 「403. 汗 (アセ) レーフル/れえふる」 「391. 汗 (アセ) ズウエート/ずうゑえと」となり重複する。

【参考】『改正増補蛮語箋』巻一「身體」部, 「肝 lever (レーフル).」(19丁表), 「汗 zweet (ズウエート).」(19丁裏)。

- ③『改正阿蘭陀語』「疾病」部 「436. 便秘 (ヒケツ)」 「437. 痰包 (タンコブ)」 「438. 癩 (シャク)」。『改正蛮語箋』「疾病」部では, 該当箇所無し。

上記以外の箇所では, 見出し語に異同は見られない (振り仮名・オランダ語のひらがな表記に関してはひとまずは措く)。①については重複の修正, ②は振り仮名に引かれた誤記, ③一行分の削除もしくは脱落, と捉えるならば, 成立の先後関係について, 以下のような流れが考えられる。

『類聚紅毛語訳 (蛮語箋)』→『改正増補蛮語箋』→『改正阿蘭陀語』→『改正蛮語箋』。

つまり, 『改正蛮語箋』は『改正阿蘭陀語』を元に改訂が加えられた資料であると考えられる。『改正増補蛮語箋』を参照した可能性を排除する根拠を, 上述の異同に即して示す。まず, ①については, 『改正増補蛮語箋』を参照して校勘を加えたならば, 『改正阿蘭陀語』「12. 雲」が「雪」に修正されることが期待されるが, 現状は重複箇所の削除にとどまっている。②に関しては, 『改正阿蘭陀語』「408. 肝 (アセ)」の振り仮名の修正が期待されるが, 現状ではむしろ振り仮名にひかれて見出し語が「汗」に変更され, 結果として『改正蛮語箋』では391. と403. とで見出し語「汗 (アセ)」の重複を生じている。③の『改正阿蘭陀語』436.-438. の3項目欠落についても, それが『改正阿蘭陀語』の配列で丁度1行分にあたることから, 任意的な削除もしくは不注意による欠落と看做すことが出来る。一方, 『改正増補蛮語箋』の配列 (上下2段) と対比した場合, 何故その3語のみを削除したのかという点が説明し難い。

以上から, 『改正蛮語箋』が『改正阿蘭陀語』に基づいて改変された版本であり, 『改正増補蛮語箋』を参照せずに成立した可能性を指摘できる。次の括弧内は, 『改正阿蘭陀語』のカタカナ表記に引きずられた変更と考えられる。(『改蛮』巻二, 1丁裏, 言語部「表 ヲイトウエンザフ」→『改阿』1280. ヲイトウエンザフ/をいとうえんぢふ→『改正』1276. ヲイトウエンザフ/ふいとうえんぢふ)

る。『改正増補蛮語箋』見出し語による補完に関しては、「天文」「疾病」「宮室」「衣飾」「金石」「数量」部においても、同様に100%である。『改正増補蛮語箋』見出し語による、『蛮語箋』と『改正蛮語箋』の見出し語不一致箇所に対する補完率は、全体で93.87% (184/196項目) に及ぶ。表3において「その他」に分類した、見出し項目の12語は以下の通り。

92. 波 (『改』『蛮』『波浪』), 202. 総督 (『改』『総督, 制台』『蛮』『官司』), 205. 通詞 (『改』『蛮』『大通詞』『小通詞』), 245. 金銀匠 (『改』『蛮』『金匠』『銀匠』), 385. 腸 (『改』『蛮』『大腸』『小腸』), 403. 汗 (『改』『蛮』『肝』) 531. 屋棟 (『改』『蛮』『屋』) 655. 煎餅 (『改』『煎餅ルイ』『蛮』『煎餅の類』), 815. 風紙 (『改』『風紙』『紙筆』『蛮』なし), 842. 医書 (『改』『薬方書』『蛮』『薬方ノ書』), 844. 薬 (『改』『蛮』『薬物』), 1062. 茴香 (『改』『蛮』『大茴香』『小茴香』), 1342. 悲ム時 (『改』『悲ム時』『悲ム時』『蛮』なし)。

これらは、『改正蛮語箋』と『蛮語箋』の不一致箇所であり、かつ『改正増補蛮語箋』とも一致しない部分である。その内訳を整理すると、熟語を一字にする (92. 波, 844. 薬), 二つの項目を併せる (205. 通詞, 245. 金銀匠, 385. 腸, 1062. 茴香, 1342. 悲ム時), 見出し語を一語に絞る (202. 総督, 655. 煎餅), 言い換えをする (531. 屋棟, 842. 医書), など、独自の工夫が見られる。また、彫り違いによると考えられるもの (403. 汗) がみられるが、これについては5.1. 以下に述べる。いずれにしても、見出し語対照調査の結果、『蛮語箋』との不一致率と『改正増補蛮語箋』による補完率から、『改正蛮語箋』は、『蛮語箋』単独の影響下に成立したと考えるには無理があり、より直接的には『改正増補蛮語箋』の影響下に成立したと考える方が妥当であることが指摘できる。これは拙稿2008で検討した『改正阿蘭陀語』の場合と同様であり、刊記と版行時期を勘案すると『改正増補蛮語箋』の配り本の影響下に成立した可能性が指摘できる^③。

5. 『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』の対照

5.1. 見出し語の異同箇所

『改正阿蘭陀語』(1382語)と『改正蛮語箋』(1378語)の2書の収録する見出し項目数の差は、「天文」部 (『阿』50語:『蛮』49語)と「疾病」部 (『阿』83語:『蛮』80語)において見られる。それを含め、見出し語の対照から差異が見られるのは以下の3点である。

①『改正阿蘭陀語』「天文」部における「12. 雲」「25. 雲」の重複。『改正蛮語箋』

表 2) 『改正増補蛮語箋』増補語彙の継承とみられる見出し語

	森島中良 (1798) 『蛮語箋』	箕作阮甫 (1848) 『改正増補蛮語箋』	森田伍一郎 (1850) 『改正蛮語箋』
23		颶 ツナミ	颶 ツナミ
28		霰 アラレ	霰 アラレ
29		大寒	大寒 ダイカン
33		天晴	天晴 ソラハレル
34		天陰	天陰 ソラクモル
47		蒼天	蒼天 アヲソラ

表 3) 『改正蛮語箋』見出し語対照結果

	項目数	『蛮語箋』 不一致項目	不一致率	『改正増補』 補完項目	補完率	その他
天文	49	6	12.24%	6	100.00%	0
地理	60	7	11.66%	6	85.71%	1
時令	45	1	2.22%	1	100.00%	0
人倫	155	16	10.32%	13	81.25%	3
身体	98	7	7.14%	5	71.42%	2
疾病	80	11	13.75%	11	100.00%	0
宮室	74	10	13.51%	9	90.00%	1
衣飾	58	7	12.06%	7	100.00%	0
飲食	37	7	18.91%	6	85.71%	1
器財	215	28	13.02%	26	92.85%	2
金石	39	8	20.51%	8	100.00%	0
鳥獸	78	3	3.75%	3	100.00%	0
魚虫	64	2	3.12%	2	100.00%	0
草木	161	28	17.39%	27	96.42%	1
数量	50	3	6.00%	3	100.00%	0
言語	80	28	35.00%	27	96.42%	1
地名	35	24	68.57%	24	68.57%	0
合計	1378	196	14.22%	184	93.87%	12

表1) 「天文」部, 見出し語対照表

	森島中良 (1798) 『類従紅毛語訳』 (['蜜語箋'])	箕作阮甫 (1848) 『改正増補蜜語箋』	森田伍一郎 (1850) 『改正阿蘭陀語』	森田伍一郎 (1850) 『改正蜜語箋』
	天文			
1	天	天	天 テン	天 テン
2	日	日	日 ヒ	日 ヒ
3	日蝕	日蝕	日蝕 ニツシヨク	日蝕 ニツシヨク
4	月	月	月 ツキ	月 ツキ
5	満月	満月	満月 マンゲツ	満月 マンゲツ
6	月蝕	月蝕	月蝕 グフツシヨク	月蝕 グワツシヨク
7	星	星	星 ホシ	星 ホシ
8	彗星	彗星 ホウキボシ	彗星 ホウキボシ	彗星 スイセイ／ハキボシ
9	銀河	銀河 アマノガハ	銀河 アマノカハ	銀河 アマノカハ
10	南極	南極	南極 ナンキヨク	南極 ナンキヨク
11	北極	北極	北極 ホツキヨク	北極 ホクキヨク
12	雲	雲	雲 クモ	雲 クモ
13	霞	霞 ユフヤケ	霞 カスミ	霞 カスミ
14	風	風	風 カゼ	風 カゼ
15	大風	大風	大風 オウカゼ	大風 オホカゼ
16	順風	順風	順風 シユンブウ	順風 シユンブウ
17	逆風	逆風	逆風 ギヤクフウ	逆風 ギヤクフウ
18	颪 ツムヂ	颪 ツムヂ	颪 ツムヂ	颪 ツムヂ
19	雨	雨	雨 アメ	雨 アメ
20	大雨	大雨	大雨 タイウ	大雨 オホアメ
21	驟雨 ニハカアメ	驟雨 ユフダチ	驟雨 ユフダチ	驟雨 ユフダチ
22	梅雨	梅雨	梅雨 ツユ	梅雨 ツユ
23		颪 ツナミ	颪 ツナミ	颪 ツナミ
24	霜	霜	霜 シモ	霜 シモ
			雲 クモ	
25	露	露	露 ツユ	露 ツユ
26	雹	雹 ヒヤウ	雹 ヒヤウ	雹 ヒヤウ
27		霰 アラレ	霰 アラレ	霰 アラレ
28		大寒	大寒 ダイカン	大寒 ダイカン
29	雷	雷	雷 ライ	雷 イカヅチ
30	電	電	電 デン	電 イナビカリ
31	虹	虹	虹 ニジ	虹 ニジ
32		天晴	天晴 ハレル	天晴 ソラハレル
33		天陰	天陰 クモル	天陰 ソラクモル
34	暗	暗	暗 クラキ	暗 クラシ
35	東	東	東 ヒンガシ	東 ヒガシ
36	西	西	西 ニシ	西 ニシ
37	南	南	南 ミンナミ	南 ミナミ
38	北	北	北 キタ	北 キタ
39	寒	寒	寒 サムサ	寒 サムシ
40	涼	涼	涼 スダシ	涼 スダシ
41	煖	煖	煖 アタ・カ	煖 アタ・カ
42	暑	暑	暑 アツサ	暑 アツシ
43	濕 シメル	濕	濕 シメリ／シケ	濕 シメリ
44	赤道	赤道	赤道 セキドウ	赤道 セキダウ
45	黃道	黃道	黃道 クワウドウ	黃道 クワウダウ
46		蒼天	蒼天 アヲソラ	蒼天 アヲソラ
47	火	火	火 ヒ	火 ヒ
48	炎	炎	炎 ホノヲ	炎 ホノヲ
49	烟	烟	烟 ケムリ	烟 ケムリ

『改正蜜語箋』の位置付け

は危い。加えて、現存の『改正蛮語箋』の全ての伝本には、蔵版印が見られない。つまり『改正蛮語箋』に関しては、逆説的ながら、「明治9年再刷」という事態以前に成立していた、ということのみが確実である。現段階では、決定的な識別方法を発見することができておらず、⑪のように注記のあるもののみを後印本とし、ほかは刊記に従い嘉永3年版とした。出版記録の精査と厳密な版種の識別に関しては、後考を俟ちたい。

4. 見出し語の対照

4.1. 調査資料

今回、調査対象とするのは、『改正蛮語箋』所収の合計1378項目である。対照資料として、『蛮語箋』は杉本 2000、『改正増補蛮語箋』は櫻井 2005b、『改正阿蘭陀語』は東北大学附属図書館狩野文庫本（書誌 ID21252490, 請求記号 10055-1, 登録番号 01601386753 = 東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成 [第4門 語学・文学] (BN11641308) MF: DCA0010258) を参照する。

4.2. 調査結果

表1は、見出し語の対照表から、『改正蛮語箋』の「天文」部にあたる49項目を抽出したものである。対照すると、『改正蛮語箋』の見出し語には、『蛮語箋』に対応する項目の無いものが見られるが、『改正増補蛮語箋』との対照により、その欠落部分がほぼ補完される

表2は、表1から『蛮語箋』に対応する見出し語が確認できない部分を抽出したものである。確認されるように、『蛮語箋』「天文」部では、『改正蛮語箋』の23颯、27霰、28大寒、32天晴、33天陰、46蒼天、^②に対応する見出しがみられない。そして、その6項目は、『改正増補蛮語箋』の見出しに一致する。『改正蛮語箋』全体、1378項目の見出し語対照の結果は、表3の通りである。仮に、『改正蛮語箋』見出し語と『蛮語箋』との対照における不一致項目数=A、Aと『改正増補蛮語箋』との対照における一致項目数=Bとおく。表3「不一致率」と「補完率」の計算式は以下のとおり（「不一致率=A÷項目数×100」「補完率=B÷A×100」）。

『改正蛮語箋』は、『蛮語箋』とは異なる見出し語を、196項目（14.22%）にわたって採用しており、「言語」部（28/80項目、35%）、「地名」部（24/35項目、68.57%）において、その傾向が顕著である。また、「時令」部（1/45項目、2.22%）「鳥獸」部（3/78項目、3.75%）「魚蟲」部（2/64項目、3.12%）では、『蛮語箋』見出し語との齟齬は少ないものの、その不一致箇所が『改正増補蛮語箋』見出し語によって、100%補完され

【嘉永3年版】

①東北大学附属図書館狩野文庫本（書誌 ID21252556，請求記号 27995-1，登録番号 01601387411）→東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成〔第4門 語学・文学〕MF 番号：DCA0020838。②京都大学文学研究科図書館所蔵本（言語学教室，2G-89）。③神戸大学附属社会科学系図書館住田文庫本（請求記号 6A-13，MID: 00022419）。④早稲田大学附属図書館洋学資料文庫本（文庫 8/C518）。⑤京都外国語大学附属図書館所蔵本（請求記号 849.3/kais，登録番号 176854）。⑥国立国会図書館亀田文庫本（請求記号 849.3/ka188）。⑦都立中央図書館東京誌料所蔵本（東京誌料 498-5）。⑧栃木県立宇都宮図書館黒崎文庫本（813-4.k）。⑨三重県立津図書館橋本文庫本（橋本文庫82-116，3469）。⑩大阪天満宮御文庫本（言語－外国語26-7）。

【明治9年版】

⑪東北大学附属図書館狩野文庫本（書誌 ID21252532，請求記号 10096-1，登録番号 01601387173）→東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成〔第4門 語学・文学〕MF 番号：DCA0020322。

【所在不明】

尚、『国書総目録』および『古典籍総合目録』，国文学研究資料館データベース「日本古典籍総合目録」（<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>）を参照すれば，以下の伝本の所蔵があったことも知られるが，現在は所在不明となっている。⑫広島大学国語学教室所蔵本→所在不明。⑬お茶の水図書館成實堂文庫本→所在不明。⑭大橋図書館所蔵本→所在不明（関東大震災により焼失か）。また，⑮京都外国語大学附属図書館所蔵本は，国文学研究資料館の上記データベースに登録が無い。

嘉永3年版の諸本間で版木の異同はみられない。但し，⑦都立中央図書館東京誌料所蔵本では，序1丁表の界外右上部と裏表紙右上部に「森田」の朱印が押される。明治9年版についても嘉永3年版との間で版木の異同は見られない。これを明治9年刊行とする根拠は，奥付に「官許／嘉永三年戊午仲夏發兌／東府 森田伍一郎／明治九丙子年七月兌發 岡所蔵」のように墨書書き入れがあることと，表紙に「明治九丙子年／七月造之／改正蛮語箋」と墨書書き入れが見られることの2点である。稿末の図版3，図版4参照。

つまり，現段階では嘉永3年刊行とされている諸本の中に，明治9年の後印本が紛れている可能性がある。また，後述の通り，『改正蛮語箋』は，『改正阿蘭陀語』に改訂を加えて成立したと考えられる為，嘉永3年刊行という奥付も，そのまま鵜呑みにするに

の通り。天文49／地理60／時令45／人倫155／身体98／疾病80／宮室74／衣飾58／飲食37／器財215／金石39／鳥獸78／魚蟲64／草木161／数量50／言語80／地名35。見出し項目数の合計は、1378である。部ごとの平均見出し項目数は、81.0 ($1378 \div 17 = 81.05 \dots$ 小数点以下第2位切捨て、 $\approx 5.8\%$)、見出し項目数の中央値(第9位)は「魚蟲」部64項目(4.6%)である。「器財」部215項目(15.6%)、「草木」部161項目(11.6%)「人倫」部155項目(11.2%)の3部で、見出し項目数が特に多い。

2.2. 問題提起

杉本1978dは、『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』をとりあげて先行資料との関連性を論じたおそらくは唯一の先行研究である。『改正増補蛮語箋』との関係については、

まったく無縁とは言い切れぬ(杉本1978d, p. 578, ll. 25-26.)

と判断を留保する姿勢を示しながらも、

こうしてみると、『改正蛮語箋』は森島中良のもの(の改良)と考えてよく、箕作阮甫とはいちおう直接的関連はないと推定してよからうと思う。(杉本1978d, p. 576, ll. 12-14.)

という見解を提示しており、

以上本書は、異名同書の『改正阿蘭陀語』とともに、幕末における日本人の平均的オランダ語愛好熱の一端を語るものとして、一つの存在意義を認めることができるであろう。(杉本1978d, p. 578, ll. 29-30.)

と述べている。つまり、森田伍一郎の著作である『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』は森島中良『類聚紅毛語訳』(『蛮語箋』)の改良であり、箕作阮甫『改正増補蛮語箋』との影響関係が未詳とされている。この資料間の位置付けにつき、稿者は拙稿2008において『改正阿蘭陀語』が『改正増補蛮語箋』の影響下に成立した可能性が高い旨を指摘した。それを承けて、先行研究である杉本1978dに対して本稿で論じられるべき事柄は、以下の2点である。

- ①『改正蛮語箋』成立について、『改正増補蛮語箋』の影響の有無。
- ②『改正蛮語箋』と『改正阿蘭陀語』との関係は「異名同書」でよいか。

3. 伝本書誌

『改正蛮語箋』の伝本は、現在までに以下(①-⑭)の14本が知られており、発表者は①-⑪の11本を確認している。管見の限り、本文の異同はみられない。

『改正蛮語箋』の位置付け

丸 山 健 一 郎

1. はじめに——問題の所在——

森田伍一郎『改正蛮語箋』（嘉永3年1850）は、アルファベットを用いずに編まれた日蘭対訳語彙集である。従来、同年に折本の形式で刊行された森田伍一郎『改正阿蘭陀語』（嘉永3年1850）と異名同書とされ、先行する森島中良『類聚紅毛語訳』（寛政10年1798、のちに『蛮語箋』と改題され流布した）を基に成立しており、箕作阮甫『改正増補蛮語箋』（嘉永元年1848）との直接的な関連は未詳とされてきた。

本稿では、『改正蛮語箋』が『改正増補蛮語箋』の影響下にあることを示し、より直接的には『改正蛮語箋』が『改正阿蘭陀語』に基づいて編まれたと考えられる旨を述べる。

2. 森田伍一郎『改正蛮語箋』（嘉永3年1850）

2.1. 資料の概要

『改正蛮語箋』は見出し語1378項目の日蘭対訳語彙集である。50丁の小本で、每半葉5行3段で9-15項目の見出し語と見出し語に対する蘭語をカタカナとひらがなで併記する。稿末の図版1、図版2を参照。

参考に、早稲田大学附属図書館洋学資料文庫本の書誌を記す。

○寸法：17.3cm×8.0cm。○装丁：薄茶色表紙、楮紙、四ツ目綴。○題簽：刷題簽、二重界「改正蛮語箋 全」。○丁付：「序」1丁表裏、1-49丁、（都合50丁）。○内題・見返し：「改正蛮語箋」・「阿蘭陀辞／改正蛮語箋／江戸 木壽堂」。○柱題：「ハンコ」。○大尾：「蛮語箋 終」○奥付：「官許／嘉永三年戌年仲夏發兌／東府 森田伍一郎」

森田伍一郎および木壽堂に関しては、『改正阿蘭陀語』を上梓していること以外に手懸りが無く、現在のところ未詳とせざるを得ない。

見出し項目は意義分類により17の部に分けて収録されている。見出し項目数は、以下